



菅生学園初等学校だより

2022年度4月号
校長室だより

「国雖大好戦必亡、天下雖安忘戦必危」(司馬法)

新年度が始まりました。お子さまたちにおかれましては、入学と進級という人生における大きな区切りの時を迎えています。健やかなるご成長を喜びとともにお祝い申し上げます。

昨年度に引き続き、「校長室だより」にてその時々のお考えを綴らせていただきます。よろしくお願い申し上げます。今回の内容は、希望に満ちた新年度のスタートらしからぬものかもしれません。ご容赦ください。

巷に目を向けますと、コロナウィルスの感染者の拡大は下げ止まりもしくはリバウンド傾向ともとれる心配な状況が続いております。さらに、イギリスでは新たな変異株の出現も確認されています。学校の運営にあたっては、お子さまの安全最優先にて取り組ませていただきます。

さて個人的な話で恐縮ながら、茲許、何人かの歴史上の特定の人物に着目していろいろと調べております。高校時代にゼミ形式で好きな科目を選択して学ぶ時間があり、「太平洋戦争に至る対米史」をかじったことがあります。その頃から連合艦隊司令長官の山本五十六海軍大将とミッドウェー海戦で空母飛龍とともに散った山口多聞海軍中将に注目をしておりました。最近、つらつらと彼らに関する本を読んでいて冒頭の言葉に出会いました。

特に山本五十六は、対米戦争についてはできれば避けたいと思っていたことが様々な記録に残されていました。特に海軍兵学校時代からの親友、堀 悌吉氏との間に交わされた書簡などからもそれが伺いしれます。まさに、上記の言葉の心境だったのかと察します。

「国大なりといえども戦を好めば必ずほろび 天下安らかなりといえども戦を忘るれば必ず危うい」。「どんな大国でも、戦争をすれば必ず滅ぶ。また天下泰平といえども戦争への備えを怠れば国の存続が危うくなる」 こんな意味になるのでしょうか。



まさに、現在のロシアのウクライナ侵攻が連想される言葉でもあります。『司馬法』は中国、周代の司馬（軍官）である穰苴（じょうしよ）があみ出した兵法を記した書物だそうです。そんな古い書物にこのような言葉があることも驚きです。

報道によれば、ウクライナに関しては様々な惨状が伝えられ、侵攻の終息には程遠い状況が続いているようです。ここ菅生学園では、入学式でご家族と楽しげに写真を撮っている姿を微笑ましく眺めながら、ウクライナの子どもたちはどうなっているのかと心配になりました。国際社会の世界平和に果たす役割が再考される時代になったということなのかもしれません。初等学校の校歌の3番の歌詞に「とわの平和築くため 学ぼう友よ学びの城で・・・」とあります。本校で学ぶ子どもたちが将来の世界平和に貢献できるような人材に成長することを期待しつつ、コロナウィルスの終息とウクライナ侵攻の終息を願う日々が続きます。

Down with covid19!